

# 冬

朱自清

(訳 横田勤)

冬の日、とつぜん豆腐のことを思い出した。それは“小洋鍋〔アルミ鍋〕”でただ煮るだけの豆腐で、とても熱い。水はぐつぐつ沸騰していて、あぶくが魚の目のようで、鍋の中には一塊一塊の豆腐があり、柔らかくすべすべして、まるで裏返しに着た白狐のオーバーのようだ。

鍋は“洋式コンロ〔空気を送り込まないで火を点けられるコンロ〕”の上であり、真っ黒にいぶされているコンロが、豆腐の白さをさらに際立たせている。

それは夜のことで、家は古くて石油ランプは点いてはいるが、それでも暗かった。テーブルを囲んで座っているのは父と私達兄弟三人である。

洋式コンロは高さが大変高く、父はいつも立ち上がり、わずかに顔を上げて目を細め、立ちこめる湯気の中に箸を伸ばして、豆腐を挟んで、一つ一つ私達の醤油の入ったお皿に入れてくれた。

私達もたまに自分でやったが、コンロは実に高くて、やはりやってもらうことのほうが多かった。これはもう食事ではなく遊びであった。

父が「夜は冷えるので、食べてみんな少し温まろう」と言う。私たちはみんなこの種の湯豆腐が好きで、テーブルにつくやいなや、切実に待ちわびて鍋を眺める。湯気が上がるのを待ち、湯気の中で父の箸から下に落ちてくる豆腐を待っている。

またある冬のこと、覚えているのは陰暦の十一月十六日の夜、S君、P君と一緒に西湖の小船に乗ったことだ。

S君は教職につくために杭州へやって来たばかりであり、事前に送って来た手紙にこう書いてあった。「西湖で遊ぼう、冬であろうともかまわな

い」

その夜の月の光は本当に綺麗で、今でも思い出すと、まだ身体の上を照らしているように思われる。前日の夜は「満月」だった。もしかしたら十一月の月は幾らか特別であったのかも知れない。九時を過ぎていた。湖上にあるのはただ私たちの船だけのようである。

少し風があり、月明かりはやさしく波を照らしていた。真ん中の辺りで光が反射し、磨き上げて新しく作った銀のようである。湖上の山はただ淡い影だけを残している。

山のふもとに時たま一つか二つの灯りが見える。S君は二つの詩を声に出して言った。「数星灯火認魚村，淡墨輕描遠黛痕 [幾つかの星のような灯りで漁村のある場所が分かる。遠くの山は眉筆と眉墨で淡く軽く画いてできた眉のようである]」

私たちは多くは話さず、ただ規則ただしい櫂の音だけがあった。私は次第に眠くなった。P君がいきなり「オイ」と言ったので、はっと瞼を開けると、微笑んでいる彼の姿が見えた。

船頭は浄寺へ行くかと尋ねた。ちょうど阿弥陀仏生誕の日で、その辺りはなかなかにぎやかだった。寺院に着いた。仏殿ではろうそくが光り輝き、尼僧庵の小間使いの老女たちが念仏を唱える声が満ち、夢から醒めたようであった。

これはすでに十年以上も前の事である。S君とはまだ文通している。P君は聞く所によると何度か仕事が変わり、一昨年はある特税局で収税官の仕事をしていたが、以後消息が無い。

台州で一家四人、一冬を過ごしたことがある。台州は山の町で、大きな谷の中にあるとも言える。

ただ一本の、長さが二里の大きな通りがあるだけだ。他の道路には、昼間はまったく人を見かけない。

夜は一面真っ暗である。時たま家の窓の中から灯りもれ出ていたり、路を歩いている人がたいまつを持っていることもあるが、それは極めて少な

い。

私達は山のふもとに住んでいた。在るものは山上の松林の中の風の音、それと天上の一、二羽の鳥の姿である。

夏の終わりにそこに行き、春の初めには離れたのだが、ずっと冬を過ごしていたような感じだった。たとえそれが本当の冬だったとしても、少しも寒くはなかった。

私達は二階に住んでいた。書斎は大通りに面しており、もし路上で話している人がいたら、はっきりと聞き取れるくらいの近さだった。しかし道を行く人は大変少なく、たまに話し声がしても、遠くの風が運んできたようで、窓の外でのできごとだとは思えないくらいだった。

私達はよそ者であり、学校へ行く以外、いつも家の中にいた。妻もその寂しさに慣れて、ただ私達親子を見守ってくれていた。外は冬ではあったが、家の中はいつも春であった。

ある時、一度私が町へ行って帰って来ると、階下の台所の大きな四角い窓が開いていて、彼女たち親子三人がくっついて並んでいた。無邪気な微笑を帯びた三つの顔が、私に向けられていた。まるで「台州は空っぽで何もなく、ただ私たち四人だけがいる。空も地も空っぽで何もなく、ただ私たち四人がいる」ようであった。

中華民国十年の年のことである。妻は実家から出て来たばかりであったが、すっかり満足していた。彼女が亡くなってから、もうすぐ四年になる。だが私はまだ彼女の微笑んでいる姿を覚えている。

どれほど寒く、大風大雪であろうとも、これらの事を思い出すと、私の心はいつも温かくなるのだ。



(中国語原文)

冬天

朱自清

冬天，忽然想到豆腐。是一“小洋锅”（铝锅）白煮豆腐，热腾腾

的。水滚着，像好些鱼眼睛，一小块一小块豆腐养在里面，嫩而滑，仿佛反穿的白狐大衣。

锅在“洋炉子”（煤油不打气炉）上，和炉子都熏得乌黑乌黑，越显出豆腐的白。

这是晚上，屋子老了，虽点着“洋灯”，也还是阴暗。围着桌子坐的是父亲跟我们哥儿三个。

“洋炉子”太高了，父亲得常常站起来，微微地仰着脸，觑着眼睛，从氤氲的热气里伸进筷子，夹起豆腐，一一地放在我们的酱油碟里。

我们有时也自己动手，但炉子实在太高了，总还是坐享其成的多。这并不是吃饭，只是玩儿。

父亲说晚上冷，吃了大家暖和些。我们都喜欢这种白水豆腐；一上桌就眼巴巴望着那锅，等着那热气，等着热气，等着热气里从父亲筷子上掉下来的豆腐。

又是冬天，记得是阴历十一月十六晚上，跟S君P君在西湖里坐小划子。S君刚到杭州教书，事先来信说：“我们要游西湖，不管它是冬天。”那晚月色真好，现在想起来还像照在身上。

S君刚到杭州教书，事先来信说：“我们要游西湖，不管它是冬天。”

那晚月色真好，现在想起来还像照在身上。本来前一晚是“月当头”；也许十一月的月亮真有些特别吧。那时九点多了，湖上似乎只有我们一只划子。

有点风，月光照着软软的水波；当间那一溜儿反光，像新研的银子。湖上的山只剩了淡淡的影子。

山下偶尔有一两星灯火。S君口占两句诗道：“数星灯火认渔村，淡墨轻描远黛痕。”

我们都不大说话，只有均匀的桨声。我渐渐地快睡着了。P君“喂”了一下，才抬起眼皮，看见他在微笑。

船夫问要不要上净寺去；是阿弥陀佛生日，那边蛮热闹的。到了寺庙，殿上灯烛辉煌，满是佛婆念佛的声音，好像醒了一场梦。

这已是十多年前的事了，S君还常常通着信，P君听说转变了好几次，前年是在一个特税局里收特税了，以后便没有消息。

在台州过了一个冬天，一家四口子。台州是个山城，可以说在一个大谷里。

只有一条二里长的大街。别的路上白天简直不大见人。

晚上一片漆黑。偶尔人家窗户里透出一点灯光，还有走路的拿着的火把；但那是少极了。

我们住在山脚下。有的是山上松林里的风声，跟天上一只两只的鸟影。

夏末到那里，春初便走，却好像老在过着冬天似的；可是即使真冬天也并不冷。

我们住在楼上，书房临着大路；路上有人说话，可以清清楚楚地听见。但因为走路的人太少了，间或有点说话的声音，听起来还只当远风送来的，想不到就在窗外。

我们是外路人，除上学校去之外，常只在家里坐着。妻也惯了那寂寞，只和我们爷儿们守着。外边虽老是冬天，家里却老是春天。

有一回我上街去，回来的时候，楼下厨房的大方窗开着，并排地挨着她们母子三个；三张脸都带着天真微笑地向着我。似乎台州空空的，只有我们四人；天地空空的，也只有我们四人。

那时是民国十年，妻刚从家里出来，满自在。现在她死了快四年了，我却还老记着她那微笑的影子。

无论怎么冷，大风大雪，想到这些，我心上总是温暖的。

□□□□□